

# 不思議な島

芥川龍之介

青空文庫



僕は籐とうの長椅子ながいすにぼんやり横になつてゐる。目の前に欄干らんかんのあるところをみると、どうも船の甲板かんばんらしい。欄干の向うには灰色の浪なみに飛び魚か何かひらめ閃いてゐる。が、何のために船へ乗つたか、不思議にもそれは覚えてゐない。つれがあるのか、一人なのか、その辺へんも同じように曖昧あいまいである。

曖昧と云えば浪の向うも靄もやのおりてゐるせいか、甚だ曖昧を極めてゐる。僕は長椅子に寝ころんだまま、その朦朧もうろうと煙けむつた奥おくに何かあるのか見たいと思つた。すると念力ねんりきの通じたように、見る見る島の影が浮び出した。中央に一座の山の聳えんすいえた、円錐えんすいに近い島の影である。しかし大体の輪郭りんかくのほかは生憎あいにく何もはつきりとは見えない。僕は前に味をしめていたから、もう一度見たいと念じて見た。けれども薄い島の影は依然として薄いばかりである。念力も今度は無効だつたらしい。

この時僕は右隣みぎとなりにたちまち誰かの笑うのを聞いた。

「はははははは、駄目だめですね。今度は念力もきかないようですね。はははははは。」

右隣の籐椅子とういすに坐つてゐるのは英吉利人イギリスらしい老人である。顔は皺しわこそ多いものの、まづ好男子と評しても好い。しかし服装はホオガスの画えにみた十八世紀の流行である。Coc

ked hatと云うのであろう。銀の縁のある帽子をかぶり、刺繍のある胴衣を着、膝ざりしかないズボンをはいている。おまけに肩へ垂れているのは天然自然の髪の毛ではない。何か妙な粉をふりかけた麻色の縮れ毛の鬘である。僕は呆気にとられながら、返事をすることも忘れていた。

「わたしの望遠鏡をお使いなさい。これを覗けばはつきり見えます。」

老人は人の悪い笑い顔をしたまま、僕の手古い望遠鏡を渡した。いつかどこかの博物館に並んでいたような望遠鏡である。

「オオ、サンクス。」

僕は思わず英吉利語を使った。しかし老人は無頓着に島の影を指さしながら、巧みに日本語をしゃべりつづけた。その指さした袖の先にも泡のようにレエスがはみ出している。「あの島はサツサンラップと云うのですがね。綴りですか？ 綴りはS U S S A N R A Pです。一見の価値のある島ですよ。この船も五六日は碇泊しますから、ぜひ見物に出かけなさい。大学もあれば伽藍もあります。殊に市の立つ日は壯観ですよ。何しろ近海の島々から無数の人々が集まりますからね。……」

僕は老人のしゃべっている間に望遠鏡を覗いて見た。ちょうど鏡面に映っているの

はこの島の海岸の市街まちであろう。小綺麗こぎれいな家々の並んだのが見える。並木の梢こずえに風のあるのが見える。伽藍がらんの塔の聳えたのが見える。靄もやなどは少しもかかっていない。何もかもことごとくはつきりと見える。僕は大いに感心しながら、市街まちの上へ望遠鏡を移した。と同時に僕の口はあつと云う声を洩らしそうになった。

鏡面には雲一つ見えない空に不二ふじに似た山が聳えている。それは不思議でも何でも無い。けれどもその山は見上げる限り、一面に野菜に蔽おほわれている。玉菜たまな、赤茄子あかなす、葱ねぎ、玉葱たまねぎ、大根だいこん、蕪かぶ、人参にんじん、牛蒡ごぼう、南瓜かぼちゃ、冬瓜とうがん、胡瓜きゅうり、馬鈴薯ばれいしょ、蓮根れんこん、慈姑くわい、生姜しょうが、三つ葉——あらゆる野菜に蔽おほわれている。蔽おほわれている？ 蔽おほわ——そうではない。これは野菜を積み上げたのである。驚くべき野菜のピラミッドである。

「あれは——あれはどうしたのです？」

僕は望遠鏡を手にしたまま、右隣の老人をふり返った。が、老人はもうそこにいない。ただ籐の長椅子の上に新聞が一枚抛ほうり出してある。僕はあつと思つた拍子ひょうしに脳貧血か何か起したのであろう。いつかまた妙に息苦しい無意識の中に沈んでしまった。

×

×

×

「どうです、見物はすみましたか？」

老人は気味の悪い微笑をしながら、僕の側へ腰をおろした。

ここはホテルのサロンであろう。セツシヨン式の家具を並べた、妙にだだっ広い西洋室である。が、人影はどこにも見えない。ずっと奥に見えるリフトも昇つたり降つたりしている癖に、一人も客は出て来ないようである。よくよくはやらないホテルらしい。

僕はこのサロンの隅の長椅子に上等のハヴァナを啣くわえている。頭の上に蔓つるを垂らしているのは鉢植えの南瓜かぼちゃに違いない。広い葉の鉢を隠したかげに黄いろい花の開いたのも見える。

「ええ、ざつと見物しました。——どうです、葉巻は？」

しかし老人は子供のようになちよいと首を振ったなり、古風な象牙ぞうげの嗅煙草かぎたばこ入れを出した。これもどこかの博物館に並んでいたのを見た通りである。こう云う老人は日本は勿論、西洋にも今は一人もあるまい。佐藤春夫さとうはるおにでも紹介してやつたら、さぞ珍重ちんちようすることであろう。僕は老人に話しかけた。

「町のそとへ一足ひとあし出ると、見渡す限りの野菜畑ですな。」

「サツサンラップ島の住民は大部分野菜を作ります。男でも女でも野菜を作ります。」  
 「そんなに需要があるものでしょうか？」

「近海の島々へ売れるのです。が、勿論売れ残らずにはいません。売れ残ったのはやむを得ず積み上げて置くのです。船の上から見えたでしょう、ぎっと二万呎フイイトも積み上っているのが？」

「あれがみんな売れ残ったのですか？ あの野菜のピラミッドが？」

僕は老人の顔を見たり、目ばかりぱちぱちやるほかはなかった。が、老人は不相あいかわらず変面めん白しろそうにひとり微笑えいごしている。

「ええ、みんな売れ残ったのです。しかもたった三年の間にあれだけの嵩かさになるのですからね。古来の売れ残りを集めたとしたら、太平洋も野菜に埋うずまるくらいですよ。しかしサツサンラップ島の住民は未だに野菜を作っているのです。昼も夜も作っているのです。ははははは、我々のこうして話している間あいだも一生懸命せうけんめいに作っているのです。はははははは、はははははは。」

老人は苦しそうに笑い笑い、茉莉花まつりかの匂においのするハンカチーフを出した。これはただの笑いではない。人間の愚ぐを嘲ちやうろう弄ろうする悪魔あくまの笑いに似たものである。僕は顔をしかめなが

ら、新しい話題を持ち出すことにした。

僕「市いちはいつ立つのですか？」

老人「毎月必ず月はじめに立ちます。しかしそれは普通の市ですね。臨時のおおいち大市は一年に三度、——一月と四月と九月とに立ちます。殊に一月は書入れの市ですよ。」

僕「じゃ大市の前は大騒ぎですね？」

老人「大騒ぎですとも。誰でも大市に間まに合うように思い思いの野菜を育てるのですからね。燐酸肥料りんさんひりょうをやる、油滓あぶらかすをやる、温室へ入れる、電流を通じる、——とてもお話にはなりません。中にはまた一刻も早く育てようとあせった挙句あげく、せっかく大事にしている野菜を枯らしてしまうものもあるくらいです。」

僕「ああ、そう云えば野菜畑やさいばたけにきょうも痩やせた男が一人、氣違ちがいのような顔をしたまま、『間まに合わない、間に合わない』と駈かけまわっていました。」

老人「それはさもありそうですね。新年の大市も直じきですから。——町にいる商人も一人残ひひとりらず血眼ちまなこになつていてでしょう。」

僕「町にいる商人と云うと？」

老人「野菜の売買をする商人です。商人は田舎いなかの男女の育てた野菜畑の野菜をかう、近



海の島々から来た男女はそのまた商人の野菜を買う、——と云う順序になつて居るのです。  
」

僕「なるほど、その商人でしょう、これは肥ふとつた男が一人、黒い鞆かばんをかかえながら、『困る、困る』と云つて居るのを見ました。——じゃ一番売れるのはどう云う種類の野菜ですか？」

老人「それは神の意志ですね。どう云うものとも云われません。年々ねんねん少しずつ違ちがうようですし、またその違ちがう訣わけもわからないようです。」

僕「しかし善いものならば売れるでしょう？」

老人「さあ、それもどうですかね。一体野菜の善悪は片輪かたわのきめることになつて居るのですが、……」

僕「どうしてまた片輪などがきめるのです？」

老人「片輪は野菜畑へ出られないでしょう。従つてまた野菜も作れない、それだけに野菜の善悪を見る目は自他の別を超ちようえつ越する、公平の態度をとることが出来る、——つまり日本の諺ことわざを使えば岡目八目おかめはちもくになる訣わけですね。」

僕「ああ、その片輪の一人ですね。さつき髯ひげの生えた盲めくらが一人、泥だらけの八やつ頭がしらを撫な

でまわしながら、『この野菜の色は何とも云われない。薔薇ばらの花の色と大空の色とを一つにしたようだ』と云っていましたよ。」

老人「それでしよう。盲めくらなどは勿論立派りっぱなものです。が、最も理想的なのはこの上もな片輪かたわですね。目の見えない、耳の聞えない、鼻の利きかない、手足のない、歯や舌のない片輪ですね。そう云う片輪さえ出現すれば、一代の *Arbiter elegantiarum* になります。現在人気物の片輪などはたいていの資格を具そなえていますかね、ただ鼻だけきいているのです。何でもこの間はその鼻の穴へゴムを溶かしたのをつきこんだそうですが、やはり少しは匂においがするそうですよ。」

僕「ところでその片輪のきめた野菜の善悪はどうなるのです？」

老人「それがどうにもならないのです。いくら片輪に悪いと云われても、売れる野菜はずんずん売れてしまうのです。」

僕「じゃ商人の好みによるのでしょうか？」

老人「商人は売れる見こみのある野菜ばかり買うのでしょうか。すると善い野菜が売れるかどうか……」

僕「お待ちなさいよ。それならばまず片輪のきめた善悪を疑う必要がありますね。」

老人「それは野菜を作る連中はたいてい疑っているのですがね。じゃそう云う連中に野菜の善悪を聞いて見ると、やはりはつきりしないのですよ。たとえばある連中によれば『善悪は滋養じようの有無うむなり』と云うのです。が、またほかの連中によれば『善悪は味あじわいにほかならず』と云うのです。それだけならばまだしも簡単ですが……」

僕「へええ、もつと複雑ふくざつなのですか？」

老人「その味なり滋養なりにそれぞれまた説が分れるのです。たとえばヴィタミンのなものは滋養がないとか、脂肪のあるのは滋養があるとか、人参にんじんの味は駄目だめだとか、大根の味に限るとか……」

僕「するとまず標準は滋養と味と二つある、その二つの標準に種々様々のヴァリエーションがある、——大体こう云うことになるのですか？」

老人「中々なかなかそんなもんじゃありません。たとえばまだこう云うのもあります。ある連中に云わせると、色の上に標準もあるのです。あの美学の入門などに云う色の上の寒温です。この連中は赤とか黄とか温い色の野菜ならば、何でも及第させるのです。が、青とか緑とか寒い色の野菜は見むきもしません。何しろこの連中のモットオは『野菜をしてこごとく赤茄子あかなすたらしめよ。然らずんば我等に死を与えよ』と云うのですからね。」

僕「なるほどシャツ一枚の豪傑ごうけつが一人、自作の野菜を積み上げた前にそんな演説をしていましたよ。」

老人「ああ、それがそうですよ。その温い色をした野菜はプロレタリアの野菜と云うのです。」

僕「しかし積み上げてあつた野菜は胡瓜きゅうりや真桑瓜まくわうりばかりでしたが、……」

老人「それはきつと色盲ですよ。自分だけは赤いつもりなのですよ。」

僕「寒い色の野菜はどうなのです？」

老人「これも寒い色の野菜でなければ野菜ではないと云う連中がいます。もつともこの連中は冷笑はしても、演説などはしないようですがね、肚はらの中では負けず劣らず温い色の野菜を嫌っているようです。」

僕「するとつまり卑怯ひきようなのですか？」

老人「何、演説をしたがらないよりも演説をすることが出来ないのです。たいてい酒しゅど毒どくかばいどく毒どくかのために舌が腐くさっているようですからね。」

僕「ああ、あれがそうなのでしょう。シャツ一枚の豪傑の向うに細いズボンをはいた才子かほちやが一人、せつせと南瓜かぼちやをもぎりながら、『へん、演説か』と云っていましたっけ。」

老人「まだ青い南瓜をでしょう。ああ云う色の寒いのをブルジョア野菜と云うのです。」  
 僕「すると結局どうなるのです？ 野菜を作る連中によれば、……」

老人「野菜を作る連中によれば、自作の野菜に似たものはことごとく善い野菜ですが、自作の野菜に似ないものはことごとく悪い野菜なのです。これだけはとにかく確かですよ。」

僕「しかし大学もあるのでしよう？ 大学の教授は野菜学の講義をしているそうですから、野菜の善悪を見分けるくらいは何でもないと思いますが、……」

老人「ところが大学の教授などはサツサンラップ島の野菜になると、豌豆と蚕豆も見わけられないのです。もつとも一世紀より前の野菜だけは講義の中にもはいりませんがね。」

僕「じゃどこの野菜のことを知っているのです？」

老人「英吉利の野菜、仏蘭西の野菜、独逸の野菜、伊太利の野菜、露西亞の野菜、一番学生に人気のあるのは露西亞の野菜学の講義だそうです。ぜひ一度大学を見にお出でなさい。わたしのこの前参観した時には鼻眼鏡をかけた教授が一人、瓶の中のアルコオルに漬けた露西亞の古胡瓜を見せながら、『サツサンラップ島の胡瓜を見給え。ことごとく青

い色をしている。しかし偉大なる露西亜の胡瓜はそう云う浅薄な色ではない。この通り人生そのものに似た、捕捉ほそくすべからざる色をしている。ああ、偉大なる露西亜の胡瓜は……』と懸河けんがの弁べんを振ふるつていました。わたしは当時感動のあまり、二週間ばかり床とこについたものです。」

僕「すると——するとですね、やはりあなたの云うように野菜の売れるか売れないかは神の意志に従うとでも考えるよりほかはないのですか？」

老人「まあ、そのほかはありますまい。また実際この島の住民はたいいバツブラツブベエダを信仰していますよ。」

僕「何です、そのバツブラツブ何とか云うのは？」

老人「バツブラツブベエダです。B A B R A B B A D A と綴りますがね。まだあなたは見ないのでですか？ あの伽藍がらんの中にある……」

僕「ああ、あの豚の頭をした、大きい蜥蜴としかげの偶像ですか？」

老人「あれは蜥蜴としかげではありません。天地を主宰しゅざいするカメレオンですよ。きょうもあの偶像の前に大勢おおぜいお時儀しぎをしていたでしょう。ああ云う連中は野菜の売れる祈祷の言葉とよを唱となえているのです。何しろ最近の新聞によると、紐ニユウヨオク育イクあたりのデパアトメント・スト

アアはことごとくあのカメレオンの神託しんたくの下くだるのを待った後のち、シイズンの支度したくにかかる  
 そうですからね。もう世界の信仰はエホバでもなければ、アラアでもない。カメレオンに  
 帰きしたとも云われるくらいです。」

僕「あの伽藍がらんの祭壇まつ壇の前にも野菜が沢山積んでありましたが、……」

老人「あれはみんな牲にえですよ。サツサンラップ島のカメレオンには去年売れた野菜を牲にえ  
 にするのですよ。」

僕「しかしまだ日本には……」

老人「おや、誰か呼んでいますよ。」

僕は耳を澄まして見た。なるほど僕を呼んでいるらしい。しかもこの頃蓄膿ちくのうし症しょうのた  
 めに鼻のつまった甥おいの声である。僕はしぶしぶ立ち上りながら、老人の前へ手を伸ばした。

「じやきようは失礼します。」

「そうですか。じやまた話わしに来て下さい。わたしはこう云うものですから。」

老人は僕と握手てした後のち、悠然と一枚の名刺を出した。名刺のまん中には鮮あざやかに Lemuel  
 Gulliver と印刷しん刷さつをしてある！ 僕は思わず口をあいたまま、茫然と老人の顔を見つめた。

麻色の髪かみの毛けに囲かこまれた、目鼻めばなだちの正しい老人の顔は永遠とこの冷笑れいしょうを浮かべている、――

と思つたのはほんの一瞬間に過ぎない。その顔はいつか悪戯らしい十五歳の甥の顔に変わっている。

「原稿ですつてさ。お起きなさいよ。原稿をとりに来たのですつてさ。」

甥は僕を揺すぶつた。僕は置火燧おきごたつに当たつたまま、三十分ばかり昼寝をしたらしい。置火燧の上に載っているのは読みかけた Gulliver's Travels である。

「原稿をとりに来た？　どこの原稿を？」

「随筆のをですつてさ。」

「随筆の？」

僕は我知らず独言ひとりごとを云つた。

「サツサンラップ島の野菜市には『はこべら』の類も売れると見える。」

(大正十二年十二月)



## 青空文庫情報

底本：「芥川龍之介全集5」ちくま文庫、筑摩書房

1987（昭和62）年2月24日第1刷発行

1995（平成7）年4月10日第6刷発行

底本の親本：「筑摩全集類聚版芥川龍之介全集」筑摩書房

1971（昭和46）年3月～1971（昭和46）年11月

入力：j:utyama

校正：かとうかおり

1999年1月10日公開

2004年3月7日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 不思議な島

芥川龍之介

2020年 7月18日 初版

## 奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>